

連載

ああ、猪猟泣き笑い

その15年を振り返り

川崎市

田宮

治

色んなことがありました：



⑧ ある猟期の出来事(2)

●とっておきの猟場、それは
1500m級の大山

翌朝7時に宿に集まり、綿密に打ち合わせをするが、猟法は「巻き狩り」である。今日の案内人は、大ベテランの柳田さん。柳田さんの友人がすでに見切り済みで、イノシシが入っているとのこと。出猟の山は大山で、クマも入っている険しい所である。メンバーは、吾妻のベテラン3名と新潟勢が3名、それに私を加えた7名である。

普通車は全て山の入口に置き、軽トラックと軽のジープに分乗し、1500mの山頂を目指すが、急坂を実に30分も登らなければならぬ。私は、愛犬5頭(1歳の「セン」は車に残した)の引き綱を短く持ち、軽トラの荷台に乗っていたが、とても座ってなどいられない。急坂のため、荷台からズリ落ちるので、荷台後部のアオリに足を掛けて「大の字」に寝て踏ん張っている状態だった。おまけにガタガタ道のため、耐えられないほど身体が痛い。

突然、カモシカが飛び出したので、5頭の犬が飛び降りようとする。引き綱を手に巻き「マテ、待て！」と、必死になだめる。やっ

とのことで、七合目ぐらいまで来て車が止まった。やれやれ、すごい所に来たものだ。単独猟では、まずやらない大山である。

そこから柳田さんの指示でマチが張られることになった。柳田さんの猟友Aさんの案内で、私はさらに車で急坂を登った。車が止まり、そこからは山道になるが、ここは柳田さん達がよく狩るイノシシの多い山だと言う。

これほど高く、こんなに悪路なのに、老人が1人で暮らしている一軒家があった。雪が降ったら下の村には下りられず、大変だろうな…。そんなことを思いながら登っていると、その家の2頭の犬が愛犬達に吠えついてきた。「クマが出るので、用心に飼っているんだよ」とAさんが説明してくれた。Aさんに「クマ号」と「ラン号」を引いてもらった。この2頭は、あまり強く引かないし、誰にでも引かれる。シャイな先犬の「ブル号」と、「クマ子号」「チヒロ号」を私が引き、黙々と頂上を目指す。Aさんの説明では、この大山の頂上での待ち合わせということだった。マチを張り終えたら、柳田さんが頂上で合流して、3人で愛犬とともに追い落とす作戦のようだ。

それにしても、行けども登れども頂上に着かない。足の痛さと、この身での3頭引きはどうにもこたえる。喉がカラカラだ。犬達も、普段ならこんな所まで引き込むことはないの、私以上に喉が渴いているようだった。私にも「俺流」の考えはあるが、今日は地元の方の猟法に従うことに決めていた。

私の基本は、車止めからの放犬で、「流し猟」で狩り進むため、このような大山の頂上まで犬を引き上げるのは初めてであった。

さらに40分ほど登ったところで反対の山：つまり、マチを張っている裏山の下の方で銃声が2発鳴った。「隣に別のグループが入っているね」とAさんが言う。そこからさらに10分ほど登ったところで、先を行くAさんが引いている「クマ号」と「ラン号」が「放せノ」とばかりに鳴き始めた。

続いて、私の3頭も立ち上がった。鳴き始めた。全犬が鳴いて、「放せ、放せノ」の立ち歩き。すごい力である。犬の鼻先には今飛んだ猪跡があり、上に登っている。Aさんが無言で私の顔を覗き込む。

私が「追われたイノシシがここを登り、マチのほうへ行っているね。しかも2頭が…」と言うと、「ど

うして2頭なの？」と訊くので、真つすぐに付くイノシシの爪痕を指で示し、「ほら、2頭ですよ。命の尽きたイノシシかもね」と笑った。

愛犬達は、前にも増して鳴き、グイグイと立ち歩きの状態である。「ねえ、放そうよ」と言う私に、「柳田さんが来るまで待つように言われているから…」とAさん。

普通、このようなときは一刻も早く犬を放すのが基本であり、そうしないといかに優秀な犬でも、すでに飛び出しているイノシシには追いつけない。

寝屋を襲い、そこからイノシシを追うのであれば、ほぼ同時に走り出すので止めやすいが、立たれて時間が経てば、それだけ止めづらく、仮に止めても遠くでの止めになってしまう。

私は、気が気ではなかった。とは言っても、Aさん達は「止め犬」が初めてなので仕方がない。

さらに10分ほど登って、ようやくまさにようやく頂上に着いた。苦しんだ分、眼下に広がる絶景に感動。良く晴れているので、大きな沢が遙か下まで見渡せた。

犬達は、咳き込むほど首輪が食い込み、喉の渴きが手に取るよう

にわかり、可哀相だった。思わず、ドリンクを出して飲ませようとしたが、犬達はイノシシを追うことに興奮して飲もうとしない。それからも20分ほど鳴き続けた。

ようやく柳田さんより連絡が入る。頂上に来られないので「放犬よし」とのことだ。さあ、放犬である。全犬が鳴きながら、飛ぶように急坂をマチの方向へ下って行く。「よし、獲れるぞ」と思いながら、Aさんと2人で犬の後を注意しながら追った。

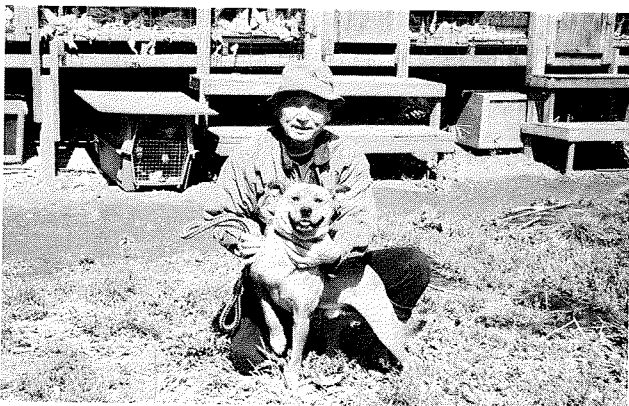
大山で、しかも急な岩場。足が悲鳴を上げていた。やっとのこと、山の小峰伝いに10分ほど下りたところで、「ラン号」と「クマ号」のベテラン犬が帰って来た。それまで「しめた」と思っていたのだが、2頭の戻りでマチを切られてしまったことを悟った。

Aさんは「どうしたのだろう？犬が帰って来た」と不満げである。すぐに帰って来た小さな犬。彼の目には、イノシシを追えない犬：と映ったに違いない。Aさんは、自らイノシシをマチに追い込むべく、小峰を下りて行った。

私は、私の愛犬達の猟芸には自信がある。すでにマチを切ってしまったので、マチに近づいたとき

に他人が居たので戻って来たのである。仕方なく2頭を呼び、まだ残っている新しいイノシシを追い出そうと、急坂で岩場だが、獣道伝いにイノシシの寝屋と思われる所に犬を掛けながら、大山の七合目を回すようにマチまで追ったが、他のイノシシは入っていないようである。

2頭は、いつものように私の前をよく狩り込んだが、私の顔を見て「ジジ、もうイノシシは居ないよ」と言うように傍を離れない。



他人には全くダメの「ブル号」

追って行った3頭は、無線は近いのだが、とうとう姿を見せなかった。ここの子達は、イノシシが入ってれば必ず狩り出す。それゆえ、私の傍に居るときは、残念だが近くにイノシシが居ないのだ。

3頭の鳴き声もやんだきり、静かなものである。単独猟では、これほど鳴きもなく帰らないことはまずない。ダメか……。仕方なく、大山の小峰の沢に下りられそうな所を選びながら、マチの人達が車を止めている所を目指して帰ることにした。大山で足場も悪く、急坂を足を引きずりながら1時間もかけて、やっと車までたどり着くことができた。

●後悔、先に立たず

車の所では、新潟から運転手として来たという若者(猟は来年から始めるという)が、すでに帰って来た「クマ子号」と「チヒロ号」を見ていくれた。4頭をスギの木に繋ぎ、無線で私が車の所に帰って来たことを伝えると、松岡さんから「2頭のマチを切ったイノシシの追い戻しに柳田さんが回っている」との連絡が入る。柳田さんは、何としても追い戻し、新潟

の3人に撃ち獲らせようとしているのである。

それを助けられない自分が情けない。帰っている犬達を撫でながら、「ダメだったなあ」とつぶやく。どっかと腰を下ろし、新潟の若者と今までの経過を話しながら、皆の帰りを待つことにした。

2時間が経過した。皆、まだ頑張っているようで、誰も帰って来ない。待つ身は辛いが、足が痛んで駆けつけることができず、情けない。すでに夕暮れになり、大スギ林の中は薄暗くなってきた。

私は、悔しかった頂上までの出来事を思い出していた。何と言われようと、犬が鳴き立ったときに放犬すべきだったのだ。それが勢子として当然のことなのに、案内を頼んでいるために遠慮して、どうしてもそれができなかった。頂上で犬達を鳴かせ続け、30分も40分も無策でいたことを考えると、後悔ばかりがこの身を責める。

追われて発砲までされたイノシシ、すでに立ってしまったイノシシを止めるのは、いかに足の速いのが愛犬達でも、そう簡単ではない。追いつくのは、山を越えてイノシシが安心して止まっていると、例え止めても駆けつけるこ

とができない場所である。

そんなことは百も承知のはずだった。それでも、今日は下にマチが張られていたので、「なあに、袋のネズミさ」と思っていた。2頭のイノシシは、頂上で「ギャンギャン」鳴く犬達の鳴き声に追い立てられ、マチの近くまで行った。そして、そこで人の気配を感じ、マチを外して難なく逃げ切ったのである。

後で「マチの横を2頭のイノシシが切った」という本間さんの話を聞くと、犬が鳴き出してすぐにイノシシが来たとのことだった。そのはずである。あの頂上からなら、イノシシでも犬でも、飛ぶ気になれば5分とかからない。それを40分も繋いだまま鳴かせていたのだ。

イノシシは、犬に急迫されてこそパニック状態になってマチに掛かるのであり、遙か離れた犬の声に追い立てられてマチの近くまで来ても、野に生きるイノシシがマチの気配を感じかないことなどあり得ない。そして、安全な所を選んで逃げる：これは、当たり前前のことなのだ。

犬達についても全く同じことが言える。放犬されて、いつものよ



わが犬舎の精鋭達

うに止めるべく、いつものスピードで追ったのだが、すでにイノシシはマチの外だった。愛犬達も、いつもと違うマチに気づき、他人が居たのを気にして追うのをやめ、引き返して来たのである。すぐ戻ったのはそのためである。

いつも1人でやっているため、愛犬達にとっては私が唯一主人であり、マチの人達は味方ではなく、ひよつとするとイノシシより恐い敵と思っているのかも知れない。いくら考えても、それ以上の結論は出なかった。

やっと皆が引き揚げて来た。その様子から、1日精一杯イノシシを追い、疲れた感じが窺えた。誰

んは、何としても追い戻し、新潟

きで、例え止めても駆けつけるこ

言える。故犬されて、いつものよ

を追い、疲れた感じが窺えた。誰

もが「今日こそ大猪を」と、懸命に頑張ったのだ。特に柳田さんは、新潟から出張って来た若者達に、どうしてもイノシシを持ち帰らせたいと必死だったのだ。吾妻の3人には、足が治ったら何猟期かかっても、きちんとお礼をしなければ：と心に決めた。

私の口から「やあ、お疲れ様」の言葉だけが出た。こんなときは、同じ目的で力を尽くした者同士ゆえ、多くを語らずとも心は通じ合うものだ。

すでに暗くなりかけているのに、先犬の「ブル号」が帰って来ない。元々「ブル号」は帰りの良い子で、こんなことは今まで一度もなかった。



1 発勝負のため、100mで10点を狙いたい

た。無線の動きも何となく変である。頂上から、マチを張った中を行ったり来たりしているようだ。シャイな子ゆえ、決して人には寄り付かない。

私は足が痛んで、山に入る気力は残っていないかった。それでも、皆に迷惑をかけるわけにはいかず、1人で「ブル号」を待つことを伝えると、皆温かく「平気だよ、待ちましようよ」と言ってくれた。皆の気持ちが嬉しく、力が湧いた。私は1人で、朝登った大山の六合目辺りまで「ブル号」を探しに向かった。

時が経ち、先にも増して暗くなった。無線も入らず、足元も不安になったので、これ以上の搜索は無理と判断して、皆の所に戻ることにした。車が近くなると、無線に入り出した。もしかして：と思いつつ、車まで行くと、「帰っているよ」と皆が笑顔で迎えてくれた。「ブルは？」と訊くと、「軽トラの下だよ」と笑って言う。

「ブル、ブル来い！」と呼ぶと、すぐに出て来て私に飛びつき、嬉しさを爆発させている。「ブル号」は、私の犬舎の一番犬である。今日は人が大勢いて、どうしても戻れずにあちこち走り回り、私を探

していたようだ。普段なら1頭でもイノシシを止める：私の自慢の犬であるが、そんなことは今日の皆には通用しないだろう。

「ブル号」を加えた5頭と一緒に、朝と同じように軽トラの荷台に乗り、真っ暗になった山道を一番車下で下る。カーブの急坂で、何台もの車のライトが暗いスギ山を照らしている。これほどの人達が居たのか：と改めて驚くとともに、不猟を残念に思った。

● 猟果なくも、安堵する

私にとつての2日間の大イベントは、まさかの「猟果なし」で終わった。いつもの私なら、イノシシが獲れなくても何とも思わないし、獲ることへの欲もない。しかし、この2日間に限っては、どうしても2〜3頭は獲りたかったし、また「獲れる」と確信していた。

そのために、本来なら出猟できない身に鞭打って、頼りの銃も持たずに勢子に徹したのである。クマも入っているという大山だったが、クマでもひるむような愛犬達ではない。ただ、銃を持たない猟は初めてであり、あまり気持ちの良いものではなかった。獵人は、愛銃を握り締めることで「よし、

来い！」の気迫がみなぎるものだと思っっている。

ともあれ、足の痛みを誰にも気づかれずに終えられ、ほっとした。吾妻の3人は、申し訳なさそうに「これに懲りずに、また来てよ」と言ってくれた。私のほうこそ礼を言わなければいけないのであるが、言葉が見つからず、感謝の気持ちを込めて深く頭を下げた。

「気をつけてな」と、遠く新潟に帰る若者達を見送りながら、全力で頑張った2日間だったと自らに言い聞かせた。

ほっとしてわれに返り、犬箱のカギや荷物を確認して帰途に着く。今度は、自分でハンドルを握らなければならぬ。強烈に痛む踵と、突然攀る足に悲鳴を上げる。休んでは足をさすり、休んでは痛みをこらえる。車は関越自動車道へ入った。

2日間、猟果はなかったが、全員ケガもなく過ごすことができた。「初めてイノシシを見ました。それも2頭も」と喜んでくれた新潟の本間さん。若者の爽やかな言葉が嬉しく、まあ、初めてにしては良い体験だったろう：と思うことにしよう。あと一歩だったね。この次は必ず獲れるよ。